
雉

時雨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雉

【著者名】

時雨

【Zマーク】

Z6652A

【あらすじ】

一応普通の高校生の前原やよいはある日、一羽の怪我しているキジバトを見つめ、手当てしようとしたのに持ち帰るが、そのキジバトはしゃべるわ、訳の分からないうことを言つて、挙げ句の果てには人間に変身するわ。そのせいで、やよいの日常は大きくかわった。

ヒストリー

雨の中、薄暗いところに一人の青年が立っていた。

周りには誰もいない。土は水を吸って、泥になつていて。

突然、泥となつた土から、何十体、何百体もの魔物が青年を取り囲むように現れた。

青年は全く焦らず、ただ周囲を見渡した。

そして刹那、見えない何かですべての魔物を切り裂いた。

辺りは突如、血の海と化した。

「おいおいやつこさん達。もつとまともな奴はおらんのか？」

青年は軽い関西弁でそう言つた。

だが、余裕を見せすぎたらしい。背後からの敵に気づくのが遅かつた。

「死ねえ！！」

敵の剣をかわしきれなかつた。だが、急所はうまく避けた。

「背後から斬りつけてくるとは　なかなか汚い手口やなあ

」

「ふふふ。あなたにはこのくらいしないと殺せないと殺せないでしょ？」

敵は女だつた。その女は口元にうつすらと笑みを浮かべている。

「悪いなあ。俺はそう簡単に死なへんで　」

「でも立つているのがやつとのようね。さすがの雉でも。」

雉と呼ばれた青年は表情をゆがませた。本当に立つてしているのがやつとのようだ。

女はその様子をしつかりと見ていて、さらに口元の笑みを深めてこう言つた。

「じゃあ、そろそろ死んでもらおうかしり。」

女は刀を握り、雉に向かつて振り下ろそうとした。

だが突然、雉の体が光つた。

「ななに！？」

焦る女を見ながら、雉は苦しそうに告げた。

「悪いなあ。まだ死ぬ訳にはいかんのや

そう言つと、雉の体は光に包まれ、消えていった。

」

光に包まれた雉が気がついたのは、コンクリートの道ばただつた。
周りは夕焼け色に染まっている。

だが、1分もしないうちに、コンクリートは雉の血で赤く染まるつ
としていた。

「あかん　　もう　　限界や

雉は人間からキジバトに姿を変えていった。

そうして静かに氣を失った。

雉は時を超え、雉にとつては未来の“現代”に來てしまつた。

。

出でいは道ばたで

「…………うわー、もうこんな時間！？早く帰らないと…………」

もう日が暮れ、空は薄暗くなっていた。周りには誰もいなく、静まりかえっている。

彼女の名前は前原やよい。雪咲高校に入学して約3ヶ月、だいぶ高校に慣れてきたまあ普通（？）の高校生で、現在生徒会に入っている。

生徒会の仕事はあまり楽じゃないらしい、むしろ大変で、今日も居残りして仕事をかたづけていた。

「何で同じ1年の子は仕事ないのよーこれってイジメじゃないの！？あーもう……今日は大事な日なの」「…………これじゃあ今日厄日じゃん！……」

やよいは一人でぶつぶつと呟きながら、猛スピードで走った。学校から家まではそう遠くない。

ふと見えたのは家の近くの曲がり角。この角を曲がったら家はすぐそこだ。

「よかつたー思つたより早く家に着きましたー」

「うひー、その角を曲がりうとした そのとき

“ゲシッ”

何か柔らかい物を蹴つたような
やよいは止まって周りを見てみると、周囲には羽が何枚か散らばつ
ていた。

そしてそこには、おそらくわざのやよいの蹴りを受けてしまった
であろう鳩が、ひっくり返っていた。

「…ひひよっとしてわたしが殺しちゃった！？」

慌ててその鳩に近寄った。運良く、その鳩は気絶していただけで、
ちゃんと生きていた。

「よよかつた～（よくなないだろ）。あ、でも座我してると手当し
てあげないと！」

やよいはその鳩をそつと拾い上げた。そして両手に抱いて、また家
まで走つていった。

その選択が、後に後悔する」となるとは知らずに

「ただいまーーー！」
鳩に気を取られたゆかり、もう泣くは真っ暗になつていて了。

「やよいお姉ちゃん遅い！今日はわたしの誕生日なのに！…」

「「」めん…すみれ。でもわざわざ待つてくれたんだ。ありがとう。

そして誕生日おめでとう。」

「…／＼分かればいいの！」

すみれはやよいとは5つ離れた妹で、意外なところ結構鋭い。

「ところでお姉ちゃん。手に持ってる物なに？」

「あ これは 道ばたで拾ったの。怪我した（怪我させた）から 。。」

「かわいそう。。。大丈夫？」この子。しかもキジバトじゃん。」

「大丈夫だよ。ちょっと待つて。この子の手当してくれるから。」

「あ、下におりてくるときは、あのペンダントしてきてねーーー！」

「はーはー。」

やよいはせわしつらって、急いで2階の自分の部屋へ向かった。

「お姉ちゃん大丈夫かな。。。すりぐるきつちよだから やひ んと手当できるのかな。。。」

そして、やよいの部屋では

「手当はこんなもんでいいかな？いいよねーよじ〇〇ーーー。」

彼女いわく手当は終わったらしい。

だが、その鳩は頭以外すべて包帯でぐるぐる巻きにされていて、飛

ぶ」とはおなが、羽を動かすことすらできぬ状態だつた。はつきり言つてこれでは手荒ぞいか怪我が悪化しそうだ。しかしやよいはすっかり満足したよつで、服を着替えてペンドントをつけていた。

どひやらそのペンドントは去年、妹が姉に渡したプレゼントらしこ。支度が済んだので、下におりよつとした。だがそのとき、鳩が少し動いた

「よう見えた。

「あれ？ ひょつとして気がついた？」

そう思つてよく見てみたが、まだ氣絶していた。

「やういえばなんかこの子地味だな」（お前のせいだり）。

包帯まみれにしても、たしかにこの鳩は地味だつた。

「そうだー」のペンドントの色違いがあつたから、それをつけてあげたら

と言つて、つけていたのは色違このペンドントを手に取り、その鳩にかけた。そのとき

「 いってえ！ な なんや」れ！ おこお前！ なんちゅー」とを

「・・・・！」

やよいは一瞬、何が起つたのか分からなかつた。だがすぐに大声で叫んだ。

「ええええええええ！ は 鳩が しゃ しゃしゃ
しゃべつた！？」

「驚くより先にこの包帯とペンドントをなんとかせえ！ ！」
しゃべる鳩は必死に抗議するが、やよいは全く聞いてない。

「な なによ！ キジバトでも普通は

「あ アホ！ それ言つたら

鳩がそう言つた瞬間、ものす「」に光がやよいとその鳩を包んだ。

「な なによこれ

そう言つて、やよいは意識を手放した。

「へへ

その鳩も同じように、氣を失つた。

すぐに光は消えたが、やよいと鳩のペンダントだけは光輝いていた。

終わつと始まつの境界線

「 ゃん ちゃん お姉ちゃん 」

小さな妹のさやきに、やよいは皿を覚ました。

「あれ ?わたし 」

「何やつてたの! ? いきなり大きな声出したから様子見にお姉ちゃんの部屋に行つて入るうとしたら、こせなりまぶしくなつて。それから少しして落ち着いたから部屋をのぞいてみたらお姉ちゃん倒れてるし。なんかあつたの? 」

「 えつと 」

そういうえば何があつたかよく覚えていない。

(たしか、キジバトの手当をして そうだ! ! あの訳の分からぬキジバトは! ?)

ふと辺りを見渡したが、それらしいものはぜりにもなかつた。

「 ゆ 夢 だつたのかな ー? 」

「何が? そういうえば拾つてきたキジバトは? 」

「あ どいかに行つちやつたんじやないかな ？それより早く下へいひ。」

妹は少し首をかしげていたが、すぐ

「わかつた。じゃあ下へいこ! 」

と言つた。やよいも後に続くよひで部屋を出た。

(なんか背中になんか付いてるような 気のせいだよねーー)

『誕生日おめでとう…すみれ…』

「ありがとう…お父さん、お母さん…」

「これは、父さんと母さんからのプレゼントだ…」

「わ…あけてもいい…?」

「いいわよ~。」

家族はすっかりすみれの誕生日にとけ込んでいた。

だがやよいは、ついわざきのキジバトの事が頭から離れなかつた。
(あのキジバト いつたい何者!?) しかもどこ行つたんだろ
つて、なんでしゃべる変な鳩の心配してゐるよ…あいつのせ
いで氣を失つたんだから…)

家族とは少し離れたところにぽつんと座つていた。

「そうよ…悪いのは全部あの鳩よ…」

「お前があんなことするからやう?」

いきなり背後から声がした。驚いて後ろを見ると、足下にキジバト
が転がつていた。

「な なんでもまだここにいるわけ!?!? まさか背中の妙
な違和感は 」

「 やよこ~? どうかしたの? やよこもひかれてひらりしゃこ。」

しかしゃよには、今は誕生日よつこのキジバトの方が気になつて、
「じめんお母さん。ちよつと調子悪いから部屋で寝ていいかな?」
といつて、猛スピードでキジバトを隠しながら自分の部屋へ走つて
いった。

「 元気にみえるんだけど 」

ところの母のつぶやきは聞こえなかつた。

やよいは部屋に入ると、すぐにキジバトに駆け寄った。

「どういう事が説明してよ……」

「説明しろと言われてもなあ。お前の背中にしがみついたことか？それ以外はお前が勝手にやつてんで？」

「手当のこと？」

「これのどこが手当やねん……羽動かされへんやん……つか手当やつたんや……」

たしかにこれでは動きたくても動けない。

「ちょっと……こまで言わなくてもいいじゃない……一応助けてやつたんだから……」

「何でもええからはよこの包帯をぬぐってくれ……」そのままやつたらなんもできん。」

「わかったわよ。」

やよいはそういうて、包帯をはさみで切つた。

「はあ。やつと自由や~。」

キジバトはうれしそうに恥じた。やよいは少し腹が立つたらしく。むすつとして

「じゃあ、早く説明してよ……」

と、きつい口調で言つた。

「へへへ。ちゃんと説明するから、ちいと待ちなさい。」

そうキジバトが言い終わると同時に、キジバトの体が光り出した。

「えええ！？何！？どうしたのー？」

やよいが焦つてているうちに、光はすつと消えていった。

そして、そこにはキジバトの姿はなく、かわりに一人の二十歳ぐらいの青年が立っていた。

「ええええええええ！？！？どうなつてんの！？キジバトじゃないのー？」

最早やよいにはパニック状態だつた。

「俺は妖魔の姫ちゅうもんや。ちなみにこいつが本当の姿やで。まあよひしゅうな。」

「 妖魔 ？」

「まあ、お前らが言つて、いわゆる“妖怪”やな。」

「ちょっと待つてよ！…わたしは煮ても焼いてもおいしくないわよ！…！」

慌ててやよいはそう言った。

「別に殺そうとか喰おうとかそないな気はないねんけど。」

「じゃあ何しようつてのよ！…」

「お前との契約を破棄したいだけや。」

「 契約 ？契約つて？しかもわたしとの契約つて…？！？」

もつやよいには訳が分からなかつた。

第一妖怪がいるなんて全く信じてなかつたので、夢ではないのかとも思つようになつてきた。

「おれがキジバトのとき、お前は俺を包帯でぐるぐる巻きにしたやろ！？」

「だから手錠だつて…！」

「 そのあと、このペンダントを俺にかけ、そして俺の名前を呼

んだ。」

「 …？」

何が言いたいのかさつぱり分からなかつた。

「 実はなあ、人間が妖魔と契約するには、人間が何か身につけてるものと同じ形のものを契約したい妖魔の同じところにつけ、そして

人間がその妖魔の名前を呼ぶことが条件やねん。お前、俺に今言ったことやつたやろ?」

そういえば、色違いだが、たしかに形の同じペンダントを彼の首につけた。

「でも、わたしあなたの名前なんて知らなかつたし、言つてないわよー。」

「でもお前言ったやろ？ “キジバト”って。俺の名前は “キジ” やから。」

たしかにやよいは雉つて言った。

よつて、やよいが勝手に雉と契約してしまった事になる。

「せやから契約を破棄する方法を探したいから、お前も手伝え。」

「何でわたしもやらないといけないのー?」

やよいは納得がいかなかつた。だが、その態度が雉の怒りにふれたらしい。

「お前が勝手に俺と契約したんやろ？」「……」責任持つのは常識

「やう！？」

なによ!!元はど

「なんやどおー!?」

「なにか...」

ついに口げんかが始まつた。

「お姉ちゃん どうしたんだろ
一人の怒鳴り声は、一階まで聞こえたらしい。
。

」

「あ～もうー！なんなのよ！」のクソ雑～！
その日は、やよいの大聲がやまなかつたとか。

変わる朝

氣づけばもう朝だつた。

「あれ、?わたしいつの間に寝ちゃつたんだろ?」ふと、時計を見ようとすると、そこには

堂々と雉が寝ていた。

「なんであんたがこんなとこで寝てんのや〜！〜！」

なんやねん 朝つぱりかひつねれこのお

雉はゆつくりと田を覗ました。どうやらなかなか口論に終止符がうたれなかつたらしく。ついすりと田に罷ができてゐる。

「お前とおしゃべりをね」とたかちに寝ておいたりせん

だが、やよいはそんなことは無視して言った。

「……………」まだここにいるのよ!! 契約を破棄する方法を探す

「ビリーバルト」

『ムニツムニツムニ』

やよいにはおかるおかる聞いた。なんだかいやな予感がある。

一度萎縮したら萎縮したものの同一性は離れては離れることがで

「なにそれ！？！？そんなの初耳だよ！？」

やよいのいやな予感が的中した。

見ただけで、どうしたものはないしな。

「じゃあ、わたし学校へいきなれば、あ、そ

やよこせふと思ひ出したように時計を見た。

時計の針は、7時30分を指していた。

「やば～っ！……遅刻する～……」

そう叫んだ瞬間、ドアをノックする音が聞こえた。

「お姉ちゃん？入るよ～。」

その声は妹だった。

「や やば！！ 雉！！ 早く隠れて！！！」

「えええ！？！？」

「お姉ちゃん。何やつてたの？」

やよいには雉をクローゼットの中にはり込んだ。

どうやら、妹には、クローゼットを勢いよく閉める姉の姿しか見えなかつたようだ。

「いや その 今起きたといいで 急いでたからつい

あはは。」

「今日は早く行かなくていいの？」

「き 今日はいいの……今から着替えるから、先にトコトコって！」

「 变なお姉ちゃん 。」

そうこうで、静かにドアを閉めた。

「 もう出てもええか？」

「 着替えるからもう少しそここいで。」

そう言ってやよいは1分ぐらいで制服に着替えた。

「 雉。もう出てきてもいいよ。」

そう言わされたので、雉はそつと出ってきた。

「それよりあんた、学校までついてくるつもり？」

「契約してもうたからしゃーないやろ。鳩になつてお前の近くにあ

る電線にでも止まつとくわ。」

「授業の邪魔とかは一切しないでよーー。」

「なんことするわけないやん。特にお前になんか。」

「なによー。どうこりう」とー?「

またけんかが始まりそうになつた。だがそのとき、

「やよいーー!!早くしないと遅刻するわよーーー。」

ところづ母の声がしたので、やよいには雉を睨みながらも下へとおりて
いった。

「ねえ、お姉ちゃん。昨日何かあつたの?」

食事中、いきなり核心に触れるようなことを妹に問われ、やよいは
食べていた焼き魚をのどに詰まらせた。

「じほーじほー!な 何もないよ?」

やよいは何とかごまかそうとした。

だが、すみれは一步も退かない。

「何もなかつたら、いきなりぎやーぎやー騒がなこよね?」

「う あーもう学校行かなきやーー!」

「あ、ちよつとーお姉ちゃん!ーー。」

「やよいー。」

やよいは、食べかけのものを台所に持つていいくと、急いで鞄を取り
に部屋へ向かつた。

一人の声が聞こえたが、やよいは無視して部屋に行き、鞄を持って
走りながら玄関を出た。

「いつてきまーすーー。」

慌ててそう言つて、逃げるように走つた。

「お姉ちゃん　ますます怪しい。」

！――

「ああもつ最悪……なんで朝からこんなに焦らないといけないのよ
！――」

「それは自業自得やで。」

「うわあ……脅かさないでよ……」

ぶつぶつと呟いていると、いつの間にか雉が目の前にいた。

突然だつたので、やよいは尻餅をつきそうになつた。

「って、人間の姿でついてくるつもりなの！？」

「ちやうちやう。俺は、昨日倒れとつたところまでいつたらキジバ
トになるつもりや。」

そう言つてじるづけに、雉が倒れていたところに着いた。

そこには先客がいた。

ワンピースを着た長髪の、やよいと同い年ぐらいの少女だった。

「あれ　？誰かいる。」

「　やつぱ見えるんか　。」

やよいは今の雉の言葉の意味がわからなかつた。

何のことか聞こうと雉の方を見ると、雉は鋭い目で前に立つてゐる
少女を睨んでいた。

ふと、前に立っている少女が少しお見えて、そっと口を開いた。

「やよい。」

少女はそう言い、微笑んだ。

「嘘　かすみ姉！？なんで　！？」

やよこの瞳は驚きの色しか映さなかつた。

そう、やよこの姉、かすみは、3年前に死んだはずだから。

崩れる日常

「ど どうして かすみ姉は死んだはずじゃ ！？」

なぜ、死んだはずの姉がここにいるのか。やよいには全く分からなかつた。

死んだはずの姉 かすみはこう言つた。

「ずっとあなたを見ていたわ。やつと気づいてくれたのね。」

「かすみ姉 『おい！！そいつから離れろ！！』 ！？」

急に雉が怒鳴つたと思うと、やよいは雉に思いつきり引っぱられた。

「雉！？」

「平氣か！？」

「！？う うん 。」

やよいはそう言つと、そつと雉を見た。

「よし。せやつたらわつと逃げるでー！」

雉がそう言つた瞬間、雉と雉に抱えられているやよいは光に包まれて、その場から消えた。

一人ぽつんと残つたかすみは、

「 逃がさない 。」

そう呟いて、くすくすと笑つた。

そのころ、雉とやよいは学校の近くの路地にワープしてきた。

「つって　。　おい、大丈夫か？」

「だ　　大丈夫。て、あんたいつたい何したの！？」

「ここまで力使って移動したんや。」

「そんなことできるの！？」

「それより、さつきの幽霊はほんまにお前の姉なんか？」

やよいはさつきのことを思い出した。

姿も声も、明らかにかすみだつた。

「かすみ姉は、3年前に自殺したの。ちょうど今のわたしげらいの時に。原因はたぶん彼氏といざいやがあったからそれだって事になつてる　。」

「　さよか　。とにかく今日は氣をつけた方がええ。たぶんまた来るやうから。」

「ちょ　ちよつと待つてよ！それつてどういフ」

「学校とやらがもうすぐ始まるんやないんか？」

ふと時計を見ると、もう時間がほとんどなかつた。

「　ああ！…ほんとだやつば～！…じゃあ雉！いらないことしないでよ…！」

やよいはそういうと、超特急で走つていつた。

「　やれやれ。」

そういうと雉は人間からキジバトに姿を変え、やよいの後に続いた。

キーンゴーンカーンゴーン

「な 何とか間に合つた 」

やよいはギリギリセーフで教室に滑り込んだ。

「おはようやよい。今日は遅かったね。」

声をかけてきたのは絵里とう、やよいの友達だつた。

「おはよ 」

「今日生徒会の集まりなかつたの?」

「 わかんない あははははははは。」

絵里は首を傾げたが、深くは追求しなかつた。

そうしている間に教師が来て、授業が始まつた。

(今朝のは かすみ姉)

授業に集中しなければならぬとは思つていても、つい思考がそつちに回つてしまつた。

結局、ほとんどの授業に集中できなくて毎日を迎えた。

「ああ やっぱりわかんない。」

「まあまあ。そつ氣を落とさないで。一緒にお昼屋上で食べようよ

！」

「せうだよね。ありがとう絵里。」

一人は屋上へ向かった。

「ねえ、やよい。あのキジバト何してるのかな？」

絵里の言葉にぎょっとして、やよいは慌てて絵里の向いてる方向を見た。

さっさからずっとカラスをくばりしだたたいていた。

「あんのクソキジバト〜！〜」

「どうとかしたの〜！？」

絵里が驚いてじりじり見てくるので、やよいは慌てて

「あ、いや〜『めん先に屋上』いってー忘れ物しちゃってー！ね？」

と聞こ、絵里を先に屋上に行かせようとした。

「わかった。じゃあ、先に行ってるから、なるべく早く来てね。」

そう言って、絵里は階段を上っていった。

「雉！！あんた何やつてんの！！！！！」

「しゃーないやん！人間の姿なつたらあかんのやろ？」

「だから、学校でさつきみたいなわけのわからないことしないでよ

卷之二十一

「用がないならもう行くわよ。」

今朝のせいかかなに近くに来と申せやかに用心しとてゐる

卷之三

上から、そんな叫び声が聞こえた。

卷之三

雑の言葉を無視して、やよいは屋上

知の言葉を無視して、やいは屋に向かって走り出しが

階段を駆け上り、屋上のドアに手をかけ、やよいは勢いよくそのド

アを開けた

卷之三

「絵里！！しつかりして！！絵里！！」そこには、倒れている絵里と、死んだはずの姉が立っていた。

やよいは絵里に駆け寄った。絵里は気絶しているだけだった。

「やよい！遅かったじゃない！ずっと待つてたのよ。」「

「かすみ姉　これはかすみ姉がやつたの　？」

「やよいはかすみに問いかけた。かすみは、

「そうよ。やよい以外には用はないもの。」

「そう笑いながら言つた。

「何で　何でこんなことするの！？かすみ姉は優しかったじゃん！」

やよいの言葉に、今までかすみが浮かべていた笑みがすっと消えた。「じゃあやよいこそ、どうして今までわたしを見てくれなかつたの？3年前から、ずーっと毎日会つているのに……」「

「！？」

そのときのやよいには意味が分からなかつた。

そんなやよいを見て、かすみはだんだんと本性を現してきた。

「　そうよね　やよいも、わたしのこと嫌いだったのね　だ

からずつと無視し続けて

「　！？ち　違つよ！－！」

やよいはそう言つたが、かすみは聞こいつとしない。

「　自分は幸せだから　わたしのことなんかどうでもよかつたのね　」

「　素敵な彼氏までつくつて　許せない　」

「　ちょっと待つて！－違つよ！－しかも素敵な彼氏つて誰のこと－？まさか　雉は違うから！－」

やよいは別の意味で焦つていた。
そんなやよいを見て、かすみは

「　許せない　やよいなんて　死んでしまえばいいのよ！－」
と言つた。

そう言つた瞬間、やよいに向かつて黒い突風が吹いた。

「うわあああ！－」

やよいの体は空中に浮いた。そして、屋上のフロансを越えた。

「　え　！？」

「あなたも、わたしと同じように死になさい。」

すみれがわざわざ、まごこの体と一緒に下に向かって落ちていった。

空の決闘

黒い風に飛ばされて、やよいは地面に向かってものすごいスピードで落ちていた。

(嘘 わたし こんなところで死ぬのかな)

そう思つて、やよいは田を開じた。

急に軽い衝撃が来たかと思つて、体が軽くなつた。
そつと田を開けると、なんと宙に浮いている。
そして田の前には

「！？き 雉！？」

「ふう。なんとか間に合つたみたいやなあ。」
雉は人間の姿で、背中には翼が生えていた。
「ど どうして翼が！？」

「とりあえず、どつかに降りるで。」
雉はそう言って、高度を下げていった。

雉とやよいは、校庭の裏にある、大きな木の近くに降りた。

「大丈夫か？」

雉はそう言って、やよいの顔をのぞき込んだ。

突然だつたのでやよいは至近距離で雉と目が合い、慌てて離れて

「だ 大丈夫！！」

と、真っ赤になつて言つた。

雉はぽかんとしながら「さよか。」とだけ答えていた。

(な なんで雉なんかに赤面すんのよ！！あんな変な妖怪に……)
気持ちを落ち着かせようと、やよいは必死になつていた。

だが、

「おい、来るで。」

と言つ雉の言葉で、それどころではなくなつた。

「どうしてやよいを助けたの？あなた、人間じゃないせに。そつか、あなたがやよいの彼氏だから？」
かすみは勝手に話を進めはじめた。

雉はただじつとかすみを見ていたが、何か思いついたようだ。

「かすみ姉！－こいつとは何にも『ああ。お前の言つ通りや。』って何言いつてんのよ！？！？ちょっと雉！？」

慌てるやよいに、雉は小さく耳打ちした。

「ええから俺に合わせろ！－もしかしたら助けられるかもしれん！」

「ええ！？ほんと！？」

「アホ！－声でかいわ！－」

多少まるでいえのような会話をして、雉はかすみの方を見た。

「そう。いいわねやよいは。幸せで！？！」

かすみがそう言った瞬間、かすみの体は黒い風に覆われた。

「みんなみんな、死んでしまえ！－」

そう言って、やよいに向かつて飛び込んできた。

「うわああ！－」

やよいは身構えたが、不思議と衝撃はなかつた。
雉が力を使つたらしい。

「平気か？」

「大丈夫。」

その様子を見ていたかすみは、

「許さない。」

そういうて、さらにどす黒い風に包まれていった。

「かすみ姉 なんで わたしを殺そつとするんだろ？

」

その問いには雉が静かに答えた。

「おそらく あの子は自分とお前を重ね、照らし合わせているんやろ。自分は不幸があつたのに、妹はちゃんとした彼氏もいて幸せそう。だから憎い。そういうこととちやうか？」

「つて、なんでわたしの彼氏つて事にしたのよー。」

「そうしたら、逆上して負のエネルギーが出てくるやろ？その時に

「 うなづいてから うなづく。誰つて何者 か。」
負のHネルギーを取り除けば、元に戻るかも知れんからな。

「だから妖魔を『わ』と呼ぶや。

雉の考えにやよいは驚いた。

かすみが先ほどより黒い風を纏ってこ
だが、驚いている暇はない。

「那二三事」

「ええええー！？」

突然引っぱられたかと思うと、やよいの体はすっぽりと雉の腕に収まっていた。

「そんなに一緒にいたいなら、一人まとめて殺してやる……」
先ほどよりも逆上したかすみは、そう言って攻撃しようとした。しかし

「はつ。殺せるもんなう

雉の手は、見えない何かをしつかりと握った。

そして、かすみに向かって

思ひつきり振り下ろした。

思いっきり振り下ろした。

「ぐわああああああああ！」

その瞬間、かすみが纏っていた黒い風が吹き飛び、光で何も見えなくなつた。

「どうなつたの！？」

やよいはだんだん見えてきた視界の中で、必死に姉を捲した。

すると、光の中から優しい笑顔がふと見えた。

「やよい。ありがと。」

「かすみ姉！」

どうやら、正気に戻つたらしい。

「ほんとこじめんね。怖い目に遭わせてしまつて。」

そう言って、かすみは静かに雉の方を見た。

「ありがと」「さ」しました。後はお願ひします。」

「 もひ、ええんか？」

「は」。ちゃんと罪は償わないと。」

「ちょっと待つて！－罪つて何なの！？」

やよいの問いに、雉ではなくかすみが答えた。

「生きている人間を殺すと罰を受けるの。たとえ未遂であつてもね。

「 そ そんな

」

「だが、罪を償えばちゃんと天国へ行ける。」

雉の言葉を聞いたやよいは、はつと顔を上げた。
かすみは幸せそうに微笑んでいる。

「じゃあ、そろそろ行くわ。」

そう言うと、足の方がだんだん薄くなつていった。

「かすみ姉！」

やよいは涙をためてそう叫んだ。

「雉さん。やよいのこと頼みます。」

雉は何も言わず、そつと頷いた。

「やよい。幸せになつてね。」

そう言うと、かすみは光となつて消えていった。

「よかつた。ちゃんと元に戻つて
やよこは少し泣きながらやつこつた。
「やつやな。
」

一人の間を、やさしい風が通り抜けた

消えていったかすみを見送り、一人はしばらくその場でじっとしていた。

「あああああ……しまった……絵里のこと忘れてた……！」

「絵里って 上で氣絶してた子の事か？」

「どうしよう……早く戻らないと……」

やよいは焦つて階段に向かおうとした。

だが、雉の手によつて塞がれてしまった。

「ちよつと雉……何のつもり？」

そう言つた瞬間、やよいは雉に抱きかかえられた。

「じつちの方が早いやろ。しつかりつかまつとけよ……」

「ええええ！？！？！？／＼／＼

雉は、やよいを抱えたまま飛び上がつた。

ちよつとそのじゆく、

「ああれ？わたし何でこんなところで？？そつ
いえばやよいは！？」

絵里は目を覚ましたらしい。

辺りを見渡したが、それらしい人影はなかつた。

「いつたいどこ行つたんだろ あ！ひょつとして下にいるかも！」

！」

ふと、繪里は思いついたようにフランス越しに下を見やつとした。

そのとき、

ちゅうど雉と雉に抱えられたやよいが屋上に到着した。

無論、繪里はその決定的瞬間をしつかりと見たのである。

「ええええええええー!?...?...せ

やよこだよねー!?...?...つてこう

か横の人誰！？！？なんで羽生てるの！？！？！」

絵里はパニック状態だった。だがやよいの方も、

「～！？やば～！～ちよつどじづすんのよ雉！～思いつきり見られた
じゃん！～～～～」

「んなこと俺に言われても～～つーかお前がはよ屋上行きたい言つ
から飛んでやつたんやで～～？」

「なによ～～わたしが悪いってわけ！～～？」

「当たり前やんか！～自業自得や～～～」

「何ですつて！～？」

「なんやねん！～～」

こつちはこつちでけんかが始まった。

しかし、すぐに終止符を打たれた。

「ねえやよい！～その人誰なの！～～～？」

「ええええ！～～～そ その 」

何とかごまかそうとしたが、なかなか思いつかない。

絵里はそんなやよいの行動を見て、

「まさか まさかサークス団の彼氏！～？」

思いつきり勘違いをした。絵里は相当の天然らしい。

「んなわけないじゃん！～～～～！」

やよいもさすがに今の絵里のボケには驚いた。
ぶつちやけ、天然過ぎにも程がある。

絵里はそんなやよいを無視して、ぽかんとしている雉を見た。

「やよいとつき合つてるんですか！～？」

「いや、やよいとは不本意にも契や 『何言つてんのよこのアホ

ボケキジバト！～』 な なんやとお！～？」

「やよいって呼び捨てなんだ ！～なんか怪しい～～」

絵里はますます変な方向に思考を巡らせていった。

「だから違うんだつて！～！」

やよいは抗議したが、

キーンローンカーンローン

予鈴が鳴ってしまったので、ちやんと抗議できなかつた。

「じゃ、とりあえす俺は鳩の姿になつとくで。」

「…………もうやだ」

それから授業中は、絵里からずつと質問攻めだつたらしく

。

授業が終わると、やよいは超特急で家に向かつた。

本当は生徒会の仕事があるのだが、絵里から少しでも早く逃げるほ

うに必死でそんなことはすっかり忘れていた。

「ああもうーー今日は最悪じやんーー！」

かすみ姉には会え

たけど

。

小ちく呟いた声は、近くを飛んでいた雉にしか聞こえなかつた。

「ただいま！――！」

やよいは家に帰るなり、すぐに自分の部屋へ飛び込んだ。だが、入った瞬間、

「うわあああああああ――！」

やよいは大きな悲鳴を上げた。

それもそのはず。部屋に入った瞬間、知らないおじいさんがいたからだ。

いや、おじいさんの靈だつた。

「ちよつと～…どうなつてゐの！？」

慌てて後ろからついてきていた雉に聞いた。

「まあ、ちよつと待つとれ。」

雉はそう言つて、人間の姿になり、そつとそのおじいさんの靈に触れた。

すると、おじいさんの靈はすつと音もなく消えていった。

「え！？ な何だったの！？」

「アリスの世界」

「さりげのせじいさんの靈や。俺はその靈を成仏させただけやで。
「れ 爽一? わたし今まで靈感なんかなかつたの?」

「それは俺と契約したからとちやうかなあ

L

「ええええええええええええええ！」

雉の答えに、やよいは相当驚いた。

その上とばかりで、扉の向こうから近づく音に気づかなかつ

突然、妹がノックもなしにやよいの部屋へ入ってきた。

もちろん、雉は隠れそこなつた。

「お姉ちゃん その男の人 誰!？」妹の厳しい視線がやよいに向けられた。

やよこの心の叫びは、誰にも聞こえなかつた。

追求 1)まかし 後の祭り

現在、一階のテーブルの周りにあるイスにはすみれ、そしてそれに向かい合ひようにやよいと雉が座っている。

そして、すみれからは厳しい視線が突きつけられていた。

「雉の馬鹿！…どうしてもっと早く隠れなかつたのよ！…つていうかなんあんなことおうとしたの！？」

「しゃーないやん！…話に夢中で気づかんかったし。それに俺は正直者やねん！…」

「誇らしげに言つな！…！」

わつかからそんないいぱかり言い合つてゐる。

「じゃ、そろそろ説明してもらおうかな。」

妹の容赦ない追求が始まつた。

「それじゃあまずーー！」

すみれは雉を指さした。

「あんた誰？」

「俺は雉っちゃんう者や。」

「じゃあ、お姉ちゃんの何？」

いきなり超特急ど真ん中の質問が突きつけられた。
雉はあっけにとられ、何も言えなかつた。

「馬鹿雉ーー何で何にも言わないのよーー！」

「んなこと聞いたって、何と言えばええかなんてわかるかいーーー！」

またひそひそ話が始まつた。

「相当仲がいいんだね。」

すみれの容赦のない指摘がきた。
そして、今度はやよいを指わし

「お姉ちゃん。やつぱり合ひ合ひるんでしょー。」

またまた超特急ど真ん中な質問が突きつけられた。
「違うーー絶対に違うからーーー！」

やよいは慌ててそう言った。

だが、すみれには逆効果だつたらしく。
「やつぱり怪しいーーー！」

「なあ、やよい。」

「何？」

「ほんまの事言つた方がええんとひつか?」

「

結局、洗こやぢり話すことになった。

5分後、説明が終了した

やよいと雉が契約したところが、すみれには相当おもしろかつたらしい。

すみれは笑い過ぎて、少し引っかけた。

「いや～ごめんごめん。あんまりにもおもしろかつたから。まあ、だいたい分かった。それで

すみれは雉の方を見た。

「雉さんって、いったい何者？そしてどこから来たの？」

雉はその質問に、少し表情を曇らせた。

「俺はただの妖魔や。人間でもないし 魔物でもない。だが

」

「俺は時代を超えてここに来たんや。

「え？」

これはやよいも初耳だった。

「俺は、最初は江戸におったんや。そこで死んで 一回未来である現世に来て それから今で言う平安にいつて また現世に戻ってきたんやうつな。」

「それって タイムスリップ！？ つていうか一度ここに来たことがあるの！？」

「そんな長い事やないけどな。」

「へえ～。大変だつたんだ 雉さんつて。」

「まあ、終わつた事氣にしても何も始まらんけどな。」

そういうつて雉は笑つた。

だが、やよいには雉が無理しているようにしか見えなかつた。

そんなことを知つてか知らずかすみれは

「ねえ、雉さんとお姉ちゃんつて離れられないんでしょ？隠れるのも大変だらうし、ちょうどいいアイデアを思いついたんだけど…！」

「「え！？」」

一人の声が重なつた。

「まあ、わたしに任せなさい！…」

妹の自信ありの顔に、二人はただただ流されていった。

対面式？

「 いけるの？」

「大丈夫！！雉さんだつてそつちの方がいいでしょ？」

まあ、隠れんではええのはありかたいいけどなあ

なら、口ひこだね！」

なんだか、やよいと雑は完全にすみれのペースに乗せらね

が

元のとき

「ただいま。」

買い物に行つていた母が帰つてきた。

「あいつ前」など!!!誰が云々云々の如きは、

「いい」

「やよこ～、すみれ～。ちよと来て～。」そしてすぐ隣に、下から女の声が聞こえた。

すみれがひょっこりとリビングに顔をのぞかせた。それを見た母は

「今日はスイカが安かつたから買つてきたわよ」と言いかけて、硬直した。

「ど　どつも。」

雉は静かにそいつ母に言つた。

結局、やよいと雉はまたテーブルの周りにあるイスに座つていた。ただ、今度はすみれではなく母からの視線が注がれた。

「あの　、あなたは誰なんですか？」
早速母からの質問がきた。

「雉と言つ者で、家庭教師をやつります。」
この言葉は、すみれからの提案だつた。
「じやあ、やよいの家庭教師を　？」
「ええ。彼女から頼まれて。」
やよいはあからさまにいやそつな顔をした。

だが、運良く母は見てなかつたらしき。

「　おい。」

「だつて！わたしが雉より立場が下だなんて……」

「つて、お前のほうが上なんかよ！……」

「あつたり前じゃん！……そうでなくともせめて対等でしょー？？」

「俺が知るかアアア……」

だんだん声が大きくなつて、最後らへんは丸聞こえだつた。

「ひょっとして、やよいは雉さんと知り合いなの？」

今度はやよいに質問が来た。

「　ええつと　」

やよいははどう言つたらいいかわからず、詰まつてしまつた。

ふとすみれの方を見ると、すぐに
「雉さんは、お姉ちゃんの友達の家庭教師をしてたんだつて。で、
たまたまその子の家にお姉ちゃんが遊びに行つたときに会つたんだ
つて。」

「やうなの？」

母は完璧にすみれの話を信じたらしい。

「うん。そんな感じ。」

やよいはそう答えた。

「やよいの家庭教師をしてもらつのは全然かまわないし、逆にあり
がたいんだけど、お金はどのくらいかかるんですか　？」

母はおそるおそる雉に聞いた。

(い) 別に いりませんよ　？」（雉は分かつてな

「ええ！…いらなんですか！？」

「まあ、別に　」

「ありがとうござります！……」

何かトントン拍子に会話が進んでいつて、どうやらいい方向に向かつたりしい。

「やよい！よかつたじやない！！こんないい人に見てもらえるなら

(お母さん だまれれいぬよ)

結局、雉はあいつと一緒に家庭教師どころになつた。

やよいからの質問があった。

「んなもん俺ができるわけないやね」がーー。」

「わよつと待つてよーー。じゃあどうすのーー。ばれたひさひーこじゅ
やじこまかせひーこじゅー」

「んーー。」

「しゃーないやんかーー。すみれがああ言ふつてこつかい ひー。
。」

「ほんのボケクソアホ雉ーー。」

「なんやどおーー。」

飽きなーのがまたまた口論が始まった。

「すみれ。本当に雉をひとやよこ仲良しあー。」

「やうだねー（笑）」

「ああああああああああああああああああ！……！生徒会の仕事すっかり忘れてた」!!!!

「あほー！ばかー！」

「あんたには言われたくないわよーーーー！」

「なんやしあー? やひよつと一発殴つたらかー?」

「やれるやんなりやつておなれこむる。」

上緯毛利也！！」

今田も前原家は騒がしかつたとか。

あわただしくて悲惨な朝

「いってきま～す！！」

やよいはそう言って家を飛び出した。

普段とはそんなに変わらない。

だが、変わったと言えば

「おい。何をそんなに急いどるんや？」

彼 雉の存在だった。

一昨日出合つてとばっかりで契約してしまい、昨日は死んだはずの姉に会つたり、友達や家族に誤解されたり 。

とにかく彼と会つてから、ろくな目にあつていない。

「つむせいーーー昨日生徒会の集まり行くの忘れてたから、仕事がたまつてんのーーーたぶんーーー」

やよいはぱぱりぱらぼうに言い放つた。

「お前、結構大変やねんなあー。」

「そり思つなら昨日の瞬間移動やつてよーーー！」

「昨日力使いすぎたんや。せやから無理。残念でしたー。」

「こんの役立たずーーー！」

「なんやとおーーーお前と違つて力使えるねんでーーー？」

もはやお約束になつてしまつたけんかが始まった。が、学校が見えたのですぐに終わつた。

「じゃあ雉ーーいらないことしないでよーーー！」

「へいへい。わかつとるわ。」

そつと置いて、やよいは生徒会室に向かつて走つていった。

やよいは生徒会室のドアを勢いよく開けた。

「失礼します。」（息切れ）

「あ、おはよう前原さん。」

「会長……！」

やよいに声をかけたのは生徒会会長の朝倉恭祐。

さわやかでかつこよく、人気がある生徒で、やよいの憧れの人でもある。

「昨日はどうしたの？ひょっとして一昨日遅くまで残つて仕事をやつてたせい？」

「い　いえ……違うんです……その　昨日はちよつといろいろあつて　。」

「そつか。一応仕事は代わりにやつといったから。」

「あ　ありがとうございます……！」

やよいは笑顔でそう言った。

「やっぱり雉とは違うなあ。ですが会長……」

と、心中で思つたそのとき、

「あら～前原さん。私も手伝つてあげたのに私には何も言ってくれないんですの～？」

彼女は林 満里奈といつて、やよいと同じ生徒会の広報総務で同じく1年生である。

ただ、お嬢様育ちなのでかなり生意氣だ。（やよい説）

「へえ～。いつもいつも仕事をわたしに押しつけておいて、少し仕事したら礼を言えって？」

「いつもあなたが勝手に私の仕事をやつてるんじゃありませんの～？」

「んなわけないでしょ！～会長～～ちょっとこれどう思います？」

「まあ！～自分が不利になつたと思つたら会長にたよるんですか？」

「なんですつて！？」

一人は犬猿の仲で、いつもけんかしている。

まるで雉とやよいみたいに。

「まあまあ～一人とも落ち着いて。一人で仲良くやつたりきつと早く終わるよ～」

会長が笑顔でそう言うので、一人はしぶしぶ従つた。

「あ、そろそろ僕行かないと。後はよろしくね。」

「「はい！～～」

一人はそう言つた後、にらみ合つた。

会長はそんなことは知らず、笑顔で生徒会室を出て行つた。

「…」

「ああもう！～なんでこんな人が同じ広報総務なんですか～？ありますわ～！」

「ひむさ～！～わたしはまだ生徒会の仕事をやりたかつただけなの

！～」

わざから回じよつた会話が続いている。

しかし、急に空気が変わった
ような気がした

6

「ねえ、何か 変じやない？」
「変なのはあんなの頃じゃないんですね？」

変なのはあなたの頭じゃないんで、その」

「ああもういい……！」

やよいはそう言つて生徒会室を飛

「好處」這兩個字，是我們常常會說到的一個詞。

満里奈の叫び声が聞こえたが、無視して走った。

が立っていた。

「少しだけ面倒な」とにならなければ、
「それってどういう

「やよいは気にせず授業受けとけ。俺一人で何とかする。」
雉はそう言つて飛び立とうとしたが、やよいに阻止された。

「」の学校のどこからもかまかしい力を感するんや」「何で！？ひょつとして何かいるの？」
「たぶんそうやううな。お前みたいに靈感強そうな奴ーーには結構
いるみたいやし。」「

雉はそう言つて、手を前に出した。

やよいが何をしているのか聞こうとした瞬間、雉の手が青白く光り出した。

そして、光が消えた時、

「さつきお前がいたところから気配がする 」。

と、雉は言つた。

「ちよつと待つて！それって あいつが危ないんじゃ！？」
やよいは満里奈のことを思い出し、慌てて走ろうとした。が、

「こっちの方が早い！」

そう言つて雉はやよいを抱きかかえて飛び立つた。

「なによ！力使えるじゃない！？」

「

雉は何も答えなかつた 。

「全く 前原さんつたら……」

満里奈は何も知らず、生徒会室でお茶を飲んでいた。（仕事じろよ

！）

しかしそのとき、生徒会室の窓ガラスが突然割れた。

「さやあああああ！！な　なんなの！？」

満里奈には見えていなかつた。そこにはまがまがしい力を放つた悪靈が。

「　お前の体　　もらい受けるぞ　　」

満里奈は、そんな声が聞こえたかと思つた瞬間、悪靈に取り憑かれたり。

「　満里奈！！大丈夫！？」

やよいと雉が来たのはちょうどそのときだつた。

「　満里奈！　」

「　離れろ！！　」

雉がそう言つた瞬間、満里奈から先ほどよりも強くて毒々しい力がでていた。

「　　ふふふ　　これで　　わたしは自由だ！！後は　　」

満里奈に取り憑いた悪靈は雉を見た。

「　お前を殺せば　　もうわたしの邪魔をする奴はいない！！」

「　ち　　まだしぶとく残つとつたんかい　　」

「　雉！？」

「　やよい。離れとけ。　」

そつ言う雉の顔は青ざめていた。

「　こつは　　早くやらんと　　満里奈つていう子が危ない　　」

「　何ですかー！？」

「　ふふふふふ　　ははははははははー！　」

「　ははははははー！　」

満里奈の声で、悪靈は大声で笑つた。

覚醒（前書き）

少しグロい表現がでていますので苦手な方は気をつけて。

「ふははは。やあ、どう料理してやるか?」

「ちょっと……満里奈……」

やよいは満里奈に向かつて怒鳴りつけた。だが

「無駄無駄。今はもうわたしが乗つ取つたからねえ。」

「……そいつのせいとおりや。」

「雉 ?」

なんだか雉の様子が変だ。

わつきからしゃきつとしている。

「そんなことより、はよせな。

「どうすればいいの!?」

「なん」と俺がわかるわけないやん!?

「な……なによそれ!……じゃあどうしたらいいかわかんないじやん!?!」

思い違いだったのだらうか

?

やよいがそのままオーラを纏つたものがこちらに飛んできた。

「ははははは。死ねえ!…」

「うわああ!…」

「くわづ!…」

雉はやよいをかばつて、なんとか紙一重で相手の攻撃をよけた。

「 つ

「雉!…」

雉はすでに息が切れていた。やはり何かおかしことやよいは思った。

「は。どうやらアヒルの化け鳩は本調子じゃないみたいねえ。そんなもんかい。」

「やつのー？」

やよいは慌てて雉の方を見た。だが雉は

「妖魔なめんなや 。」

そう言って口元に少しだけ笑みを浮かべた。
しかし、雉の顔はかなり青ざめている。

そうしてころしつちに、どんどん攻撃が飛んできた。

「ほらほら。もつといくよ！！」

無差別に攻撃が飛んでくる。

雉はやよいを抱えながらなんとかかわしていた。

「つづけ。ちよこまかちよこまか

そう満里奈に取り憑いた悪霊が言った瞬間、

「おい！何があつたんだ！！」

とこづきとともに、生徒会の担当の先生が入ろうとした。

「せ 先生！？」

「前原……それに林も……お前らいつたいここで何しているんだ！
！……は……そここの男……何者だ……さてはお前が

「ち 違うんです！……雉は

「ふん。」「どもが 」。

やよいが言あつとした瞬間、悪霊はその先生に向かって攻撃を放つ

た。

「う うわああああああ……」

「ダメー！！」

やよいがそう言つた瞬間、大きな爆発が起つた。

だが、煙がはれたとき、先生はほとんど無傷だった。

その代わりに

「」

血まみれの雉の姿があつた。

二老！知！

やよいは田に涙をためて雉の元へ走った。
「馬鹿!!! 人助けで自分が二件の事にな

倒れた雉をやよいは慌てて体を起こしてそうとした。

卷之三

「！そんな奴は！」といったら、もう少しひどい目にねえ！」

卷之三

卷之三

卷之九

雉は細々とそう語つた。だが、やよいには聞こえてなかつたらしい。

「わたしはお前を絶対に許さない……！」

へえ、そうかい。
じやあ死になよ。」

悪靈はやよいに向かつて大きな砲撃を撃つた。

「やよいーーー！ 逃げ 「

「雉を いろんな目に遭わせて
！！」

許さないんだからあああああー。

そのとき、やよいの中で向かがはじけた。

目覚めた力と気づかぬ心

やよいは敵の攻撃をかわさなかつた。

「はははははーー馬鹿だねえーー化け鳩と一緒に死ぬつてかい。
あははははーー！」

しかし、煙がはれたそこにはやよいが光を纏つて立っていた。

「な、なんだと！？」

「えええ！？！？な、なにこれ！？どうなつてんの！？」

やよいも自分がどうなつているかわからなかつた。

「くわ……今度こそ、死ねえ……」

「う、うわああ！？」

またやよいに向かつて攻撃が飛んできた。今度は5・6発ぐりこ。やよいはせとせり手を前に出した。すると

「ど、どうなつてるんだ！？」

今度はやよいの前に光の壁ができていた。

「これ、どうこうつ事、！？」

「お前、」

「雉！大丈夫！？」

雉の声を聞いて慌てて雉に駆け寄のひつした。そのとき、

「貴様あああ！？」

そう言つて満里奈に取り憑いた悪霊はやよいに向かつて殴りかかるうとした。

だが

「しつこいわよ！」

と言い、やよいは満里奈の体に触れた。

とたんに満里奈の体から黒い煙が上がり始めた。

「ぐ、ぐわああああああああああああ！」

そして苦しむ満里奈の顔が見えたと思うと、悪霊はすぐに満里奈の体の外へと飛び出した。

すると、満里奈からでていたオーラはすっと消えていった。

「うわ……満里奈……しつかり……」

満里奈はぐいたうと坐っているかねせんと思はった。

「おのれこうなつたらあの女にそうはいかせんで。」

卷之三

知はそこまで悪靈に向かって振り上げた腕を思いつき振り下ろした。

それと同時に雉はその場に倒れた。

一
知
！
！

満里奈を机に寝かし、やよいは急いで雉に駆け寄った。

「しつかりして！－雉！」

そう言つて雉の体を揺さぶつた。

い
痛
い
ね
ん
け
ど

雉からそんな弱々しい声が返ってきた。

「雉！……ちょっと待って……救急箱そこにあるから取つておええ。」

そう言つと雉はすつと立ち上がつた。

「だ 大丈夫なの！？ひどい出血なのに！…」

「お前が俺に触れたとき、痛みが急に和らいでな とる自分の力で回復したんや 。」

「え !？わたしが !？つて、わたしどうしちゃつたの !？」

やよいは訳がわからずにそう雉に聞いた。だが、こきなり雉に引つぱられ、気がついたらやよいは雉の腕の中にすっぽりと収まつっていた。

「ち ちょっと雉！！／／／何して 」

「やつぱり 翡翠を持つとつたか 」

「 !？ひすい！？」

雉はやよいを解放して、こいつ言つた。

「玉玉や言つてな、じつつい力を持つた玉があるんや。そのうちの一つがお前の体内にあるつちゅうわけや。」

「ええええええええ！？！？な なんで！？」

「それはわからんが ジツついレアやからお前これからねらわれるで。」

「ちょっと待つてよ……！そんなこと言われたつてわたし戦えないよ……！」

慌てるやよいを見て、雉は笑つて
「ちやんと守つたるから。」

そう言った。

(もう！何で雉なんかに！／＼／＼)

た力と氣づかぬ心

目覚め

新たな風

やつとの想いで悪霊をほりたやよこと雉は、もう一つの問題で
ぶち当たっていた。

「ねえ雉　これどうじよつ　。」

やよこが言ったことは今の生徒会室の状態。ほりあつて壊滅
寸前である。

しかも、満里奈や先生のこともある。

「すまんな　。もう力は一個も残ってないんや　。」

「じゃあ　。」

「どないしょうもない。」

「やつあつやつと言わないでよーー。」

「んな」と叫びたつて

「」

ややおとなしい言い争いをしていたそのとき、

「ん　。な、なんなんですのこればーー。」

「やっぱーー！雉早くーー！」

雉は慌ててキジバトの姿になつた。運良く満里奈は鳩になる瞬間
は見られなかつたらしく。

「ちよつと前原さん……これはいつたいビリーハーいとですのーー？つ
て、なぜ鳩がーー！」

「え？そ　それは　。」

やよこは言ひ詰めた。雉のことを言つわけにはいかないし、でも
この状態をじづり言つたらいいかわからなかつた。

ふと、満里奈はやよいを見た。

「あら？前原さん。何か光つていませんか？」

「へ？なんのこと？」

「じぼけないでくださいーーあなたの服、胸あたりが緑色に光つてい

まわるー!

やよいは実際に確かめてみたが、なんにも見えなかつた。だが、そのときの雉のつぶやきで顔色を変えた。

「どうやら、透視能力があるみたいやな。あの満里奈つて子。」

「ええ！？じやあ

「お前の翡翠を見たんやろ？」「

「ちよつと前原さん！－聞いてますの！？」

本筋の「」を詠むとした瞬間、

氣絶していた先生が目を覚ましてしまった。

「どうしたことだ！－なんにも覚えてないっていうのは！－」
結局、何も知らないということにした。そうしないと後が大変なことになる。

「だから知らないんです。突然爆発して」
「ひょっとしてあのとき見たあの男が犯人か！」
「ち　違います！－あの人は犯人じやないです！－」
とつさにそう言つてしまつた。
「なぜそう言いきれる？」
しまつた、とやよいは思つた。だが、言つてしまつた以上どうしようもない。
「彼はわたしの親戚で、わたしが弁当を忘れたので届けに来てくれたんです。それで巻き込まれて　　わたしを助けてくれたんです。

「じゃあそいつはどうにいるんだー!?」

「警察を呼びに行つてもらいました。」

やよいのところの嘘は、どうやらつまへいつたらしく。

「つくまあ今日は大目に見てやる。ただし……今度こんな事があつたら生徒会は活動禁止だー!わかつたなー!」

「ははい。」

一人は渋々了承した。

「もう！…いつたい何がどうなつているんですの！…って、ちよつと前原さん…？」

「『めん！…もつや鈴なりそつだから…』…じゃね…」

今話してもたぶん大変なことになるだろうから、後で言おひ。そいつを考えた。

キーンゴーンカーンゴ・ン

「せ セーフ 「

結局息切れしながら教室までたどり着いた。絵里の視線が痛かった

が無視して席に座った。

「おはよっやよいーーって、そんなに警戒しないでよ。

「い」「じめん」「めん。で、何?」

「なんか今日、転校生が来るんだって。」

「転校生?」

やよいがそう言った瞬間、

「おーい。STするから席に座れ。」

そう言う担任の声とともににある長髪のオレンジ髪で、背の低い男の子が入ってきた。

「はい。転入生を紹介する。名前は風見 琉度君。かざみ るど」

「よひしへお願いします!」

席はやよいの後ろだった。だから琉度が席に着いたとしたとき、田中があった。

「よひしへ。」

「え！？」

すぐに琉度は微笑んだが、最初に見せた違和感のある田中を、やよいは見逃さなかつた。

「ちよっとやよいーー！知り合いなの？」
「ううん。」

(なんの

?あの風見つて子

)

思考がそこから動かなかつた

。

1から100まで不思議な奴

「アホ、腹筋引いてるやつが来たの？」

「どう生まれ？」

「ひよことしてバーフ！？」

先ほどから風見琉度という転入生の周りには女子が集まっている。理由はおそらく、小さくてかわいいことと、姿勢である。「風見は、橙の長髪をポーテールにして、やけになぜか包帯のよつた帽子をかぶつている。

「いつに言われても

風見は正直困っていた。見た目はただの小さな子供のようにしか見えない。

九月三十日

「何が？」

やよいがそう言つた瞬間、目の前に逆さまの風見がいた。

「……わざわざお見送りまでして、驚かされないでよ。」

心臓バクバク状態のやよいは風見に怒鳴りつけた。

そばにいた絵里は驚いている。軽々と天井にあるライトに足を挟ん

でいるのだから。

「いやあ、ついつい、驚かせたなら」めんね。

周りからおお～といつ声があがつている。

「何かやつてたの?中国拳法とか。」

「やつてないよ？ただ自己流で。

「うまいやつは誰だ？」

「四一〇〇一はハサギ、

そう言つて、こやかに笑つた。

「前はどういたの？」

「アフリカ。」

「ええええええええええええ！？！？」

あまりにも謎が多すぎる。

ぶつちやけ、

1から100までわからない奴だつた。

「んなこと俺に言われても……。」

昼休み、絵里をほつたらかして（おこ）屋上に来ていた。
そこで雉と合流したのである。

「なんか変なのよ。っていうか根本的に違うというか
「せやなあ」 そんな奴知り合いにはおらんねんけど～

「

（まわか

んなわけあらへんか。）

「どうしたの？雉？」

雉が急に黙り込んでしまったので、やよいは少し不安になつて雉の
顔をのぞき込んだ。

「！－！な なにしとるねん！－！／－！」

雉は少し赤くなつて慌てて退いた。

やよいにはよくわからなかつたらしく。鈍感もほびがありますぜ。

「とにかく、危ないとと思つたらその首に掛けてるペンダントを握つ
て力込めばすぐに行くから。」

「そう言えば これとれないの？」

「今更かい。契約してんねんからとれるかい。」

「ちょっと待つてよ！－！体育の授業どうじろつてのー？」

「知るかあ！－！」

「楽しそうだね！」

「「うわああああああああああああ！」」

いきなり音もなく風見がやつてきた。

「久しぶり。雉。」

「ええええええ！？！？雉知り合い！？」

「ええええええ！？！？雉知り合い！？」

あんた

なんで

「 がいじむおるんや?」

雉は少ししあきれたような声を出した。

それとは裏腹に風見は笑顔で

「 そんなこと、面白そうだからに決まってるじゃん!」

そう言つてやよいの方を見た。

「 へえ~。知り合いだつたんだ~!...」
「 ディーディーディー?」

「 こじつは

雉が何か言おうとした瞬間、

「

「

風見は雉に何か言つた。

すると雉は黙つてしまつた。

その代わりに

「 僕と雉はまあいわゆるマブダチ見たいなかんじ。」

「 はあ

「

風見は相変わらず笑顔で話していた。

「 で、その~ 雉の正体知つてるの?」

「 知つてるよ。僕だつて力使えるし!」

「

「ええええええええええええ！」

「つていつても、せいぜい敵の声を聞き分けるとかそんなくだらな
い能力だけど。」

やよいは啞然としてその話を聞いていた。

いきなり訳がわからない。突然現れて、雉のことを探つていて、自
分の事を思いつきりばらして。

雉はさつき何を口止めされたのだらうか。

そのとき、

「3体近づいてるよ。」

風見がそう言つた。

「！　！」

遅れて雉も気づいた。

「えええ！？！？何でわかるの！？」「
やよいは慌ててそう言つた。

だが、すぐに雉がこういった。

「隠れとけ！たぶんねらいはやよいや！？」

「だろうね。契約している人間の魂つて、あいつらにしたらおいし
いらしいから。」

「わたしつて料理なの！？喰われるの！？！？」

「つつこみどりさんはそこかいな。」

「うるせー！？」

いつものことだが、大事なときにけんかになる。

「けんかしてる場合じゃないよ。もうかなり近づいてる。」

二人はけんかをやめ、そつとその方向を見た。

「やよい。早く

「雉は力回復しないんでしょう…?わたしも戦う…」

「アホ言え…!そんな事したら

「

「けんかしてる場合じゃないよ~。」

敵はもうすぐ目の前に来ていた。

「もう…!田向回来るのよ…!雉…!あんたつて疫病神…?」

「んなわけないやろ…!」

「もういい…!あいつら何とかしないと…!」

「無理するんじゃないで。」

「雉…!」

信頼関係ができた会話をして、敵をにぎりみつけた。

「翡翠つて、けなげだねえ。」
「雉の奴、えらく面白いのと契約した
ね。」

この声は一人には届かなかつた。

裏の裏はやつぱ裏

「はあ～。やよこのやつ、どう行ひあやつたんだろ～？」
置いてきぼりにされた絵里は悲しそうにそう呟いていた。

「今日も何かおかしかったし 大丈夫かな？」
小さな不安が胸をよぎった。

その辺、二〇屋上。

「こんなの野郎おおおお！」

雉はほとんど力が使えないのに、自分の武器をやらぬ多に振り回していた。

「ちょっと雉！…壊れたらまた問題に」
「せやかで、いちいちんなこと気にしどつたらひすあかんやろ！…」

最早屋上はフェンスはめちゃくちゃコンクリートはボロボロだった。

「ちょっと風見君！…手伝つてよ！…」

「そんな事言つたつて 物理攻撃は効かないんだよ…雉みた
いに武器なんかないし…」

「そんな

やよいはかなり困つた。

「おい！やよい！…あれは

「全然使えないの…！もう訳わかんない～！」

どうやらやよいの能力、翡翠はなぜか全く働かないようだ。
雉は一応戦力として問題はないのだが、3対1ではさすがに厳しい

うじい。

「くそ！…もうええわ！！」

「ちょっと雉！！」

雉はわずかに残っている力をほんの少しだけ使って敵を一掃した。

だが

「はじめられたね。」

「え？」

風見の一言は正しかった

。

「くそ　　囮かい　　」

雉がそう言つと、とてもなくでかい魔物が姿を現した。

「　　ははは　　今日は大量だ　　！」

「　　ちい！　！」

雉はほんの少し力を使つただけで、かなり息が上がっている。
やはり、今朝の影響が　　。

「雉！！危な　　」

「離れる！！こっちに来るんやない！！！」

そう言つたとき、敵が大きな刀を振り回した。

雉はやよいの方に気を取られて、かわせなかつた。

「あやははははははは　　！」

「雉！！！！！！！」

雉からは血は出でていない。だが、生命力を吸われたらしい。
息が微弱になつてしまつてゐる。

「やばいよ　　早く何とかしないと　　」

「 雉 」

やよいの耳には風見の声は聞こえていなかつた。
雉がこんな事になつて、豪快に笑う敵の声以外は。

「お前ええええええええええ！」

やよいがそう叫ぶと、それに反応したよつに体が緑色に光り始めた。
しかし、

「！」のときを待つていたぞ！…翡翠には弱点があるからな…！」

「…？」

やよいには訳がわからなかつたが、氣にせず力を使おうとした。

「待つて！力を使っちゃだめだ！」

風見の声が聞こえたと思つと、

「…………痛…………！」

急にやよいは自分の体を押さえてしまうなり始めた。

「ははははは…翡翠の力の特徴は膨大な力…それは長所だが、
短所もある…！」

「う…………ぐわつ…！」

かなり苦しくなってきた。

「翡翠をまだ十分に制御できていないお前は、その膨大な力を増幅させられたら、肉体がついていかんだろう！……」

「何で　わたしが翡翠だって　知ってる　の

！？」

「ふ　　そんなに知りたければ教えてやろうか・冥土のみやげにな。」

にやにや笑ってやよいを一瞥した。

「お前は何にもわかつちやいない。たとえばお前の

「

途中から何を言つているのかわからなかつた。

「だめ　もう　限　界

「

やよいは意識を手放した　。

「あはははははは！…これで翡翠は俺のモノだあ！…」

汚い笑い声をあげて、やよいにさわらうとした。そのとき、

やよいを守るよひに縁のバリアーが現れた。

もちろんやよいは気絶している。

だが、いつの間にか增幅された力を制御したようだった。

「なんだと！…くそ…！」うなつたら・・・」
そういうて敵は刀をやよいに向かって振り下ろした。

だが、

「やつぱつ」の一人、気に入つたから。お前邪魔。

「てめえ！――風見 う」

「別に仲間になつた覚えはないけど？ただ、珍しいモノがここにあるとしか言ってないし。」

風見はさつきのとは別人のように話し始めた。
「増幅された力を制御するなんて 人間では普通はできない芸
当だし。だから 」

「な !！」

突然、風見の目が真っ赤になつた。

消えてなくなれ

そして、壊れた周りが、みるみるうちに消えていく。

風見がやついた瞬間、魔物は一瞬で塵となつて消えた

。

「面白いや。いつたい何年ぶりかな？」

愉快だと言わんばかりの口調で、楽しそうに風見は呟いた。

わけわからぬ自分の力

「あれ？　わたし」「やよいは田を覚ました。

周りを見渡すと、何の変哲もない屋上だった。

「何してたんだっけ？」確かに雉と話してて風見君が来て敵が！！」

慌てて飛び起きた。だが、誰もいない。

魔物も、風見も雉までもが。

「雉？　雉！！」

不安になつてそう言つたら、違つ声が返つてきた。

「彼ならここにいるよ。」

背後から声が聞こえたので慌てて振り返るとそこには風見が立つていた。

「運がよかつたね。彼、まだ大丈夫みたい。」

「　　ちょ　　ちょっと待つて！…ビリ…ツ事…？あの

魔物は！？」

風見はやれやれといつよつよつよいを見た。

「君が力を使つたんだよ。満身創痍の状態で。」

「わ　わたしが！？」

「君、宝玉を持つてたんだね。」

「うん　　。」

やよいはおそるおそる答えた。

「大丈夫。誰かに言つたりしないから。」

風見はそう言って笑った。

やよいはほつと安心したが、雉を見て表情が変わった。

「ねえ！…雉は　　！」

「今は生きてるけどかなり危ない状態だよ。」

「そんな　　いつたいどうしたら　　わたしの力じゃ無理なの
？」

やよいはさう言つて風見を見た。だが風見は首を横に振つた。

「できればいいんだけどね。君は見たところ翡翠でしょ？翡翠は回復能力はあんまり期待できない。傷ぐらくなら治癒できるけど生命力の回復は無理だと思うよ。」

「そんな　　」

「方法がないって訳じゃないけど。」

「え！？あるの！？雉を助ける方法！！」
やよいはすがりつくような目で風見を見た。

「うん。だけどそれはかなり危険なんだ。」「やる！！それでやる！！お願い教えて！！！！！」

「後悔しないでね。」

その言葉の意味は、今のやよいにはわからなかつた

。

「それひどいひこう

」

「じゃあ、少し待つて。準備するから。」

「準備つて？」

「行くんだよ。」

「エリコと聞いた瞬間に風見は静かにこういった。

「回復の宝玉、カーネリアンを持つてゐる奴のところへ。」

「

カー

ネリアン

?

「そう。色で言つたら赤かな?回復を主に扱う宝玉。知り合いだか
ら。」

「ねえ 風見君つて 「

「琉度でいいよ。やよいちゃん。」
いきなりやよいちゃんと呼ばれて驚いたが、すぐにこう続けた。

「琉度って何者なの！？」

その質問に琉度は笑顔でこう答えた。

「ただの高校生に見えないハーフだよ。」

「外国人との？」

「そう言ひの意味じゃなくて
「じゃあどひこいつ意味？」

「悪魔と人間のハーフだよ。
」

そう言った彼の目は、血に染まつたような赤い目だった。

入り乱れる思考

「カーネリアンを持つてる奴のところへ行こう。」

そう琉度に言われたやよいは、静かに琉度が準備をしますのを待つていた。

何か手伝おうかと言つてみたが、「大丈夫だから少し待つて」と言われ、そつと焦る気持ちを落ち着かせようとしていた。

雉は一向に目を覚ます気配はない。

それどころか雉の体は少しずつ冷たくなってきているような気がする。

「雉。。」

さわつても何も変わらないとわかつっていたが、そつと雉の頬に触れ、優しくなでた。

不安がどんどんこみ上げてくる。

そんなとき、そんな不安を吹き飛ばすような声がかかった。

「準備できたよー。」

「ほんとー?」

琉度はそう言つたが、特に変わったことはない。

「えつと どうすんの ?」

少し心配になつて聞いてみた。

だが、琉度はにっこり笑つて

「まあ落ち着いて。」

と言つた。

そして琉度は目を閉じた。

すると、いきなり空気が凜としたものにかわり、真っ白の陣が地面に浮かび上がった。

そして、その陣に小わなゆがみができ、次第に通れるトンネルのようになつていた。

「行くよ。」

「えええ！？！？」

やよいは驚く暇もなく、琉度に引つけられて時空のゆがみに飛び込んだ。

「……………！」

気がついたら、周りは霧がかかってるように真っ白だった。

身近に感じるような気もするが、こんなところは初めてだった。

「……………！」

「……………！」

「あれ？知らないの？学校の樹齢100年の木。それが靈樹。で、

今は

「その木の中に居るって事！？」

信じられないように周りを見た。

何も見えないけど、何か居るような気がしたから。

耳をすましていると、小さな足音が聞こえた。

やよいには身構えたが、巯度は余裕で微笑んでいた。

足音がだんだん大きくなり、こちらにやつてくる者が肉眼で見えるようになってきた。

そのときに見えたのは、小さな少女。

髪はピンク色のショートヘアで、目はきれいなアクアマリンのような色をしていた。

その少女はやよいに気づくと、そつと声をかけてきた。

「」たなどこの 何用ですか？」

「あ あの 」

やよいはとつさの事でうまく言えなかつた。

そんなやよいの代わりに琉度は答えた。

「実は君の力を貸してほしい。助けたい奴がいるんだ。」

「あなた 琉度ではないですか。お久しぶりです。」

その少女は改まつてお辞儀をした。

やよいも慌ててお辞儀をする。

「先ほどは失礼いたしました。琉度の知り合いですよね？」

「あ はい。」

「わたしは都と申します。ご存じの通り、カーネリアンを持つています。」

彼女、都はそう言った。顔には表情が全くない。まるで感情もないかのようだ。

「それで? お助けしたいと申すお方は?」

「彼を 雉を助けてほしいんですね! -!」

都は一瞬目を見開いた。そして静かに

「 そう ですか 「

と告げた。

さつきとはまるで様子が違う。

顔には、懐かしさと切なさがにじみ出でていた。

「わかりました。少しお待ち下さい。」
都はそういつと、すつと姿を消した。

「どうしたんだろ？」
稚と何かあつたのかな。
。

そんなやよいの疑問に琉度は静かに答えた。

「彼女は雉の妹で、巫女なんだよ。」

「い
妹お！？」

やよいは驚いたが、次の言葉に息をのんだ。

小さな声が、響き渡つた

。

「え
？」

「彼女は巫女だから
ちやならないんだよ。」
――

一族の命令で妖魔である雉を殺さなく

冷たい過去

「ちよちよっと待つてよ！…それって雉は

「彼女しかいないんだ。カーネリアンを持つているのは。」

琉度はそう告げた。

「それに、彼女は雉を殺したいとは思っていない。逆に好きなんだと思うよ。」

その言葉にやよいはさらに驚いた。

「それじゃあ都さんは？」

好きな兄を、一族の命令で殺さなくてはならない。

そう言つ事になってしまった。

「じゅじゅあ、何で一族の命令に従わないといけないの！？」
やよいには信じられなかつた。命令だからといって、自分の好きなようにできない事が。

その思いが琉度にも伝わったのか、少しきなそうに琉度は言つた。

「少し、雉の過去を教えてあげる。プライバシーの侵害にならない程度だけど。」

昔、雉はある結構有名な寺で生まれた。

元氣で怖い物知らずのわんぱく小僧だつたらしい。

そしてその3年後に、妹の都が生まれた。

兄弟はとても仲がよく、いつも一緒にいた。

だが、両親は兄を寺の僧、妹を巫女にして一族をもつと大きくしようとしか考えていなかつた。

雉は将来、侍になりたかつた。だが、両親はそんな事を許してくれるはずもなく、仕方なくこつそりと剣技を磨いていた。

時は流れ、雉が17歳、都が14歳になったとき、両親は強引に一人を自分たちの思うようにしようとした。

だが、雉はそんな両親が嫌で、この寺を出て行こうと決心する。

ある満月の夜、雉は寺を出ようとした。

そのとき、都が止めにかかる。

「なぜ！？なぜお兄様は寺の僧になるのが嫌なのですか！？」

「俺は自由に生きていきたいんや。一人の侍として。だから、ここで親のいいなりにはなりとうない。」

雉の決意は固かつた。都はそれを聞いて

「ならば、わたしもともに参ります！」

そう言つた。

だが、そのとき両親に見つかってしまう。

雉はとつさに身構えたが、都が雉に

「逃げてください！ここはわたしが引き受けます！…」

「都　　！－すまん！－」

そう言つて雉は逃げ、都は捕まつた。

親は雉を何とか探そうとしたが、都が

「お兄様を捜すというのなら、わたしは今すぐ腹を切ります。」

そう言つて、兄のために巫女になつた。

だが、兄は半年後に殺され、妖魔になつてしまつ。

都は悲しみに明け暮れた。だが、雉は妖魔として再びこの世に召還

された。

都はそのことを親から聞き、とても喜んだ。

しかし巫女は悪を浄化する存在。

巫女として、悪は払わなくてはならない。

両親からでた言葉は

妖魔となつた雉を殺せ

つまり

「つまり、雉を守るために巫女になつたのに、雉を殺す存在となつてしまつた」というわけだよ。」

「そ そんな 」

あまりにも悲しすぎる。いくら捷だからと言つても。

「一度は彼女も雉を殺そうとしたんだけど、雉は恐ろしく強くなつてて、歯が立たなかつたんだって。」

やよいは眠り続ける彼を見た。

こんな悲しい事があつたなんて。

「つて、なんで琉度がそんな事知つてるの！？」

「結構物知りなんだよ。ハーフだし。いろんなところから情報が入つてくるんだ。」

「へえ～ 」

そういうもんなの？と半ば少しあきれたが、都がやつてきたので話は中断された。

「お待たせしました。準備ができたので 雉を いじりまし。

「あ はい！！」

そいつで雉を都の前に寝かせる。

都は複雑な顔で治療を始めた。

手から出でてくる赤い光はそつと雉の体を包み、回復させていった。

「すごい カーネリアンって 」

正直うらやましかった。何もできない自分と違って、雉を助けることができるというのが。

「 雉！ 」
「 う
」
雉はそつと目を開けた。
。

時がたつても

「雉！…よかつた…………。」

雉はそつと田を開けて、やよいの方を見た。

「やよい」

見知らぬ場所なのでふと周りを見渡そうとして、表情が変わった。

近くにいる、都を見たから。
都も複雑な顔をしている。

「お前が俺を」

「カーネリアンの力で、です。決して巫女の力でお助けした
のではありません。」

「なんことどうやつたつてええわ。
雉は怒りが混じった声でそう呟いた。
そして冷たくて鋭い目で都を睨んだ。

「やよいさんに頼まれました　あなたを助けてくれと
人間の頼みには巫女は応じます…………。」

負けじと凛とした空気を放つて都が話す。

「なんやと？」

雉は先ほどから殺氣も出し始めた。

回復してもらったのに、礼はしないし逆に睨みつけるなんて。

「ちょっと　一人とも」

「言つたつて無駄だよ」

風見はそう吐き捨てるように言つた。
でも、いくらなんでもこれはひどい。

「ふざけんのやつがいこしきや……」

「ふざけんなぞ、おせん！！」

「うう もあ向で魔を助かたるやーー！」

「」

それに

L

「いい加減にしなさいよ

ふとやよいの小さな声が聞こえた。

「え? うわあ、どうしたの?」

琉度の声も聞こえていないのか、ふらつと立ち上がる。

「アーティスト」

「おやこさん?」

二人もさすがに驚いてやよいの方を見た。

だが、やよいはそれすら聞こえてないよつだつた。

「妖魔だの巫女だの
そんな事でなんかして

やよいの体に、緑色の光が集まってきた。

翡翠の力が高まつてきていいようだ。

おしゃべり

「んなくたらない」とけんかするな！！！とくに雉！！！！！」

維はもつ訳がわからぬ。

「その腐った根性直してこい！――！」

そう言つた瞬間、雉の近くで大爆発が起つた

「ついて　つて、やよいーーー！　んめえ何すんじゃボケエ！」

！」

「ひねれーーー！ 黙つて聞いてればいいが、ちゃんとーーー回復してもらつたくせに礼もうまく言えないのーーー？」

「じやかあしいーーー！ 何で天敵の巫女に

そう言つて雉はうつむいた。

口ではそう言つてゐるが、ビリしたらいいかわからぬ。そんな氣

がした。

やよいはそんな雉を

もう一回爆発させた。

「うわ～ やよこりゅやさじうつこいとを
手でよかつたねえ～。」

琉度はそう言って雉の元へ足を運んだ。

「おに」「ア～！一度だけでなく2度までも～～！」

「うむむむ。あんたがここまで物わかりの悪い奴だなんて思わなくて。
て。」

「なんやども～！？」
「あ～らなによ～。」

「あ～あ 始まっちゃったよお約束が。
琉度の言つた通り、つるといのが始まつた

が

翡翠が爆発系苦

「ふ あはははははは！」

突然都が笑い始めた。今まで無表情だった都が。

「み 都 さん？」

「ご ごめんなさい だつて あんまりにも面白くって」

都はまだ笑い足りないのか、おなかを必死で押さえている。

「雉は お兄様は おそらくわたしのために演技してたの
に」

「ええええええええええええええ！」？？！「そうだったの！？！？」

やよいはものすごい勢いで雉をみた。

雉はあっけにとられていたが、ぼそりと

「そんなつもりやなかつてんけど まあそないなるんかいな

と答えたとか。

」

「ん」　　「めんなさい」

「いいんですよ。お兄様の　　久しく見ていなかつた笑顔が見られたんですもの。」

そう言つて都はぎにちなく微笑んだ。笑うのは本当に久しぶりのようだ。

「大丈夫なんか？お前　　俺とおつても　　」

「わたしも逃げたんです。今は巫女は続けていますが、なるべく一族とは接触しないようにしております。ですが　　そろそろ危なそうです。」

「見つかりそなんだね。」

「はい　　」

琉度の問いに都は悲しそうに答えた。

「お兄様は妖魔ですから　　巫女の気配とは大きく違つよつで

「んなら、せつせと退散するわ。ありがとうな、都。」

「はい！」

そう言つて一人は笑つた。

何百年の歳月も気にしないような、そんな笑い顔だった。

「そう言えども、巫女つて長生きできるの？」

やよいの素朴な質問には琉度が答えた。

「本来の巫女つて言つのは巫女さん姿してる奴の事じやなくて、一度死んで神の力によつて再生された者を巫女と呼ぶんだよ。だから巫女は死ぬ事はないんだ。姿も自由自在に変えられる。」

「一度死ぬの！？」

「死ぬつていつても、魂を取り出すといふか　　なんかそつと儀式があつたみたいだよ。」

「へえ　　。」

そこまでしてなるようなものだらうか。

ふと不思議に思ったが、雉の声でその思考は途絶えた。

「おー。 センス行けで。」

「うん！ 行こう、琉度。」

「はいはい。 ジヤあ下がつて。」

そう言つて、琉度は小さな白いペンドントを取り出した。するといじに来るときと同じく、いつな陣が浮かび上がった。

「じゃあ ありがとうござました。」

「お元氣で。 兄を頼みます。」

そつ言つて、都は静かに笑つた。

作られたトンネルをぐぐつてこむ最中、ふとやよいよ呟いた。

「何か今日災難だなあ～ 朝も昼も」

「仕方ないよ。翡翠なんてレア中のレアだし。」

「なんやお前ばとんのかやよ。」

「誰のせいだと思つてんの！……！」

「はいはい悪かった。」

「ほんとに反省してるの～？（にやり）」

「キモイ！ 琉度そのキモイ笑い顔やめんかい！……！」

そう言いながら、3人は元の世界へと戻つていった。

現れた、新たな謎

雉が治つて1週間が経つた。

いや、経っていたと言う方が無難かもしれない。

「ねえ！！大丈夫だったの！？やつぱり誘拐！？」
「ちゃんといつてよ！！」

「まさか神隠しとかいうんじゃないだろ？」「
やよいと琉度は学校に帰ってきた瞬間、質問攻めだった。
やよいは最初、わけがわからなかつた。

「ちょ　　ちょっと！－いつたい何の　　」

そう言いかけたやよいの代わりに琉度が凜とした声でこいつった。

「悪いけど、警察に口止めされてるんだ。事件の事は決してもらくなつて。」

やよいを引き連れて琉度は教室を後にした。

そしてまたまた屋上にやってきた。

「あ～もひづなつてんのよこれ！！」

「カレンダー見たでしょ？その通りだよ。」

「じゃあなんであの木の中ではだいたい1時間ぐらいしかいなかつたのに帰つてきたら1週間も経つてるのよ！－」

そう、やよい達が元の世界に帰つてきたときには、雉を助けるために靈樹に入ったときからなんと1週間も経つていたらしい。その間は警察沙汰にもなり、大きな話題になつたようだ。

やよいの間にこじはぶと出てきた雉が答えた。

「あの木の中は空間が歪むからな。何が起るかわからんねん。

「雉ーー（びっくりした） それってどういう事？」

「簡単に言つとやなあー 木の中から出ぬときに空間を無理矢理こじ開けて帰つてきたさかい、ただ3分ぐらいしか歩いてなくても実際の世界では多くの時間が経つてしまつたつちゅうこいつや。」

「そんな

「

「学校側はなんとか隠しきつてくれてるようだけど

結構まづ

い事になりそうだよ。」

琉度はそう言つてため息をついた。

確かに生徒が昼休みに突然消えて、1週間後に何もなかつたかのように現れてと、学校側からしたらとても不可解な現象である。多分教師達には何を言つても無駄かもしれない。

「じゃあ こつたこどうすれば やよこはやう言つてため息をついた。」

「じゃあ、僕が何とかしてあげるよ。」

「琉度！」

琉度はそう言つてこいつと笑つた。

「やよこちゃんならボロが出るかもしねないでしょ、僕に任せてくれ！」

「でも 」

「いいからいいから。雉の事はちゃんと伏せとく。」

そつ言つて琉度は職員室に向かつて屋上を後にして

雉はそれだけこいつと、ふつと鳩に姿を変えて飛んでいった。

「言ひ忘れとつたけど ありがとつな 。」

「大丈夫かなあ～琉度 」

「あいつの事やから何かたぐらんじるんや。心配あらへん。」

雉はそつ言つてやよこの頭にポンッと手を置いた。

雉はそれだけこいつと、ふつと鳩に姿を変えて飛んでいった。

「

馬鹿

」

小さな言葉は誰にも聞こえなかった。

授業があるので教室に帰ってきた。

教室に帰るとひとり質問攻めにされると覚悟していたが、

「やよい〜どこ行ってたの？次は移動だよ！…」

「早く行こうよ！…」

など、質問とはかけ離れた声をかけられた。

まるで何もなかつたかのようだ。

「え？」

ぽかんとしているやよいの耳に、追い打ちをかけるような声が聞こえた。

「やよいちゃんも早く行かないと遅れるよーーー！」

その声は琉度だった。

「あ ちょっと待つてーーー！」

訳がわからぬまま慌ててみんなの後を追つていった。

結局、その日は屋上から教室に戻つて一度も1週間消えていた事を質問されなかつた。

しかも、家に帰つても同じように、何事もなかつたかのように

「おかえり～お姉ちゃん。あ、雉さんもいらっしゃ～い。」

「おかえりやよい。あ、どうも～。」

ごく普通な返事がかけられただけだつた。

何もなかつた。

いや、1週間やよいと琉度（と雉）が消えていたといつ事實がなくなつていた。

「どうなつてんの

ー?
」

現れた、
新たな謎。

謎に謎が重なつて

「なんで…? なんでみんなの記憶が…・・もつわけわかんない…!」

自分の部屋で一人叫んでいた。

その様子を雉が少しあきれながら見ている。

「やよい。今ここで叫んでもなんもあらへんし、逆に親や妹にまた怪しまれるんとちやうか?」

「そうだけど・・・」

確かに雉の言ひとおりだ。今ここで取り乱しても何にもならない。でも・・・

「でも、やつぱりおかしいよ。人の記憶あやつるなんて普通にできるの?」

「・・・そこは俺にもわからん。やつからいつかかってるのはそれやな。」

「翡翠やカーネリアンみたいなかんじのじやないの?」

「宝玉に、記憶操作の潜在能力があるなんて聞いた事ないで。」

ますますあやしくなつてくる。

「そうだ! 琉度だ!」

突然やよいは思いだしたかのようにこういった。

「琉度がどないしてん? あいつがやつたとでも言ひとんか?」

「違つ! 琉度も記憶なくなつてるのかなつてー!」

「まさか

雉が急に真剣な顔をして悩み始めた。

「どうしたの?」

少し心配になつて聞いてみた。

「いや、なんでもあらへん

結局雉は何を悩んでいるのか、わたしには教えてくれなかつた。

「つと/or わけで。」

「いやいきなりつと/or わけでつて言われても。つと/or カコつこ
こに来たの！？」

話は飛んで、現在琉度の家。

「雉に飛んでもらつたの」

「なんですかその不気味な笑顔は・・・まあいいや。要するに、僕
が記憶あるかないかってこと？」

「うん！―そういうこと…！」

やよいはかなり真剣なまなざしで琉度を見た。
雉も少し用心深く見ている。

「…………で、こいつたい何のことですか？こいつたにビリの記憶のこと
？」

「あ 説明してなかつたつけ 。」

やよいは少し崩れて、氣を取り直して続けた。

「わたしが琉度に頼んでカーネリアンを持つ雉の妹さんのところへ
行つた記憶！」

「うん。普通に覚えてるけど？」

やはり琉度は覚えている。

別に覚えていても覚えていなくてもあまり結果は変わらないような

氣もするが

「じゃああれはいつたい誰が

「あれって？」

瑞度は興味津々に聞いてきた。

瑞度も知ってるでしょ？私たちが1週間消えていたっていう話！

やよいはそつ言つて琉度を見た。

現度は相変わらずお一とりとした顔

しかし言葉はや。いと知は驚いた

「そんなの簡単じゃん。これを使えば。」

そう言って琉度はある物を取り出した。それはただの小さなマイク。

「「はい?」

雉とやよこは声を重ねてやつた。

「闇の通販で買った。」

「うわあ、やがてまたアラスカへ戻るみたいだ。」

「「まじですかあああー?ー?ー?ー!ー?」

一人の叫びはむなしく響いた。

「何？これって結局骨折り損のくたびれもうけ？」
やよいはため息をつきながらそう言った。
雉もかなり脱力している。

「ちょっと二人とも。僕を疑つてたの？」
「違うよ。原因がこんな事だったなんて」

「どうしたの雉？」

少し思い詰めた顔をしている雉を見たやよいは、気になつて声をかけてみた。

「いや　なんでもあらへん。帰るか。邪魔したな。」

「『めんね琉度！』」

一人はそう言って琉度の家から出ていった。

「　相変わらず鈍いんだか鋭いんだか
琉度はそう言ってあやしい笑みを浮かべた

。」

「ねえ雉。さつき何を悩んでたの？」

やよいは琉度の家を出る前の雉の顔が気になつて聞いてみた。
すると雉は悩んだ顔でこう告げた。

「琉度のことを疑っているつもりはないねんけど 普通はいく
ら通販でその商品があつても 相当な力がないと、できんのや
。」

「え？」

雉の一言で、風向きは大きく変わった

。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6652a/>

雉

2011年1月6日14時23分発行